

不信仰に陥った者たちへの励ましとしての聖餐  
——ウェスレーの宣教のわざとしての聖餐を基盤にして——

坂本 誠

ウェスレーはその生涯をかけて聖餐を大切にしてきた。16歳になる以前には聖餐に与っていた。日記、日誌を読むと、当時の英国教会が年に4回から6回しか聖餐をしていなかったのに対して、後期になると3、4日に1度の割合で聖餐に与った。ウェスレーの聖餐は、最初は小規模の聖餐であったが1765年以降、メソジスト運動が広がるにつれて、聖餐受領者の数は増大していく。日誌をみると、初期にはソサエティのメンバーを英国教会に出席させ、聖餐を受領するように促し、後期には、聖餐式に多くの時間を割き信仰者の靈性に配慮した。聖餐は本人のみならず、メソジスト全体にとっても内的な力となっていたのではないだろうか。

1791年にロンドンのシティーロードチャペルで亡くなるまで、彼は馬に乗り、多くの地域を歩き、その距離三十万キロ、説教回数四万回という精力的な生涯を送る。身長は158センチだったと言われている彼が、これ程精力的に旅行をできたというのも、彼の福音宣教の情熱によるところが多いが、それだけでなく聖餐という場で信仰を確認していたからではないか。特に、ウェスレーは自己の信仰理解に戸惑いを覚えつつも、聖餐を用いて自分の信仰をみつめ、神に悔い改めて立ち返り、自分の信仰を確認しつつ天国を目指したのではないだろうか。

## I ウェスレーの聖礼典理解

ウェスレーが聖餐をどのようにみていたかをみていく前に、ウェスレーが聖礼典をいかに理解してきたのかを見ていきたい。彼は聖礼典を以下のように語る。

キリストによって定められた聖礼典は、単なるキリスト者信仰のバッジや証憑ではない。それは恵みのしるし、すなわち神の我々に対する好意のしるし（外的なしるし）であり、それによって神は目に見えない形で我々の内側に働きかけ（内的な恵み）、信仰を起すばかりか、それを強め、確かなものとする。福音の時代に我らの主によって定められた聖礼典は二つあり、それは洗礼と聖餐である<sup>1</sup>。

聖礼典は「内的な恵みの外的なしるし」であり、可視的な「しるし」と不可視的・霊的な「実質」の部分から成り立っている。ウェスレーの場合、形式的に聖餐や洗礼を受けるだけでは不十分なのである。実質的部分である神の恵みの受領が聖餐においては問われている。

## II ウェスレーの生涯と聖餐

ウェスレーが、いかに聖餐を不信仰に陥った者たちの励ましと考えるようになったのか。それは、ウェスレーの生涯、特に初期から中期のウェスレーの歩みが重要となる。

ウェスレーはアメリカに行く途中の船の中で嵐に出会い死を恐れる。彼が船底に降りてみると、モラヴィア派の人々が熱心に賛美をし、祈祷をしていた。ウェスレーが死ぬのは怖くないのかと聞くと、彼らは神に対する絶対的確信があるから怖くないと答えた。その結果、モラヴィア派の人々との接触が始まる。帰国後、外的には様々な慈善活動を行い、キリスト者として歩んできたが、絶えず心の中では揺れ動き、罪から全く救われたという確信が持てず、自分はもう説教をやめるべきであろうかと、モラヴィア派のペーター・ペラーに質問する。ペラーは、信仰を説教し続けることを助言し、ウェス

<sup>1</sup> The Works of John Wesley (Bicentennial Edition), Abingdon Press, 1990, (以下 BE Works と示す) BE Works 5 p.188 参照。Sermon #15, 'Means of Grace', II-1, 1746.

レーを励ます。そしてモラヴィア派の影響を受けて、アルダスゲート街でのモラヴィア派の集会に出席し、1738年5月24日、第2の回心を体験する。

しかし、それですべてが解決したのではなかった。確かに1738年5月24日は、ウェスレーの生涯の中で一つの転機であったことは事実である。1738年10月30日の兄弟サムエルに宛てた手紙の中でウェスレーは以下のように語る。

キリスト者ということて私が意味していたのは、キリストを信じる者は、罪がもはや支配していない者でした。そして、この言葉の本来の意味で、私は5月24日の心が不思議と熱くなる経験まではキリスト者でなかったのです。というも私は罪と闘い続けたのですが、罪が私を支配していたのです。しかし、この日を堺に罪は支配しなくなったのです。それはキリストの自由な恵みによるのです。<sup>2</sup>

1738年5月24日はウェスレーにとっては重要な転機であったことは事実であった。しかし、それですべて解決したわけではなかった。ウェスレーの中には回心後も闘いがあったのである。その様子をウェスレー自身は1738年11月に以下のように語っている。

あなたは、現在、罪からの自由を味わっておられるでしょう。しかし、それは罪が一時的に停止しているに過ぎないのです。決して罪からの解放ではないのです。あなたには平安がありますが、それは真実の平安ではないのです。もし死が近づくならば、恐れが戻ってくるのです。<sup>3</sup>

それでは、そのような自分を克服できない状態はどこから来るのか。ウェスレーは、以下のように自分を回想する。

私は現在キリスト者ではないのです。・・・キリスト者というものは、キリストの霊の実を持っている者です。・・・それは、愛、平安、喜びなのです。

しかし、これらのものを私は持っていません。私は神のどのような愛ももって

<sup>2</sup> BE Works 25 p.575, Letter to Samuel Wesley, 1739.10.30.

<sup>3</sup> BE Works 19 p.22, 1738.11.23 この言葉は友人チャールズ・デラモットがウェスレーの状態を語ったもの。



ないのです。父も子も愛していないのです。私は別の問いによって答えます。「あなたが私を愛しているといかにして知ることができますか。いかにしてあなたが熱いか冷たいかを知ることができるのでしょうか。」<sup>4</sup>

ここからでる結論についてウェスレーは、

ここから私は以下のことを結論します。……私は自分のすべての持ち物を貧しい者を食べさせるために与えたのですが、私はキリスト者ではないのです。私は困難に耐え、すべての事柄において自己否定をなし、十字架をとりあげたのですが、私はキリスト者ではありません。私のわざには何の意味もありません、受難も何の意味もありません。20年以上も恵みの手段を常に使用してきたのですが、私はキリスト者ではないのです。他のすべての信仰を持っていても、心を清めてくれるあの信仰は持っていないのです。誠に誠にあなたに告げます。私は再び生まれなければならぬのです。私やあなたが生まれ変わらない限り、神の国を見ることができないからです。<sup>5</sup>

ウェスレーは、自分の中には聖霊の実である愛、平安、喜びがないことに気づいたのである。罪を克服できずに、確信を持たない、信仰が揺れ動く自分自身を発見するのである。

### III 決定的な事件

ウェスレーは、回心後、ドイツ国内を訪問し、モラヴィア派から小グループによる牧会の素晴らしさを学ぶ。それは1938年6月から9月にかけて行われた。そしてついにその事件は起こる。ウェスレーは、1938年7月4日マイエボルンでモラヴィア派より聖餐に与ることを拒否されたのである。同行の友人インガムには許されたが、ウェスレーには許されなかった。岩本氏はこの事を以下のように語る。

<sup>4</sup> BE Works 19 pp.29-30, 1739.1.4

<sup>5</sup> Ibid, pp.30-31.

ジョンはモラヴィア教会から「疑いを抱いているため平安がなく、休みなく揺れ動いている信仰者であって聖餐を受ける資格がないもの (homo perturbatus)」として聖餐を拒否されたのである。もともと、聖餐を軽視し、無視するような人物であったならば、それは取るに足らない出来事であったろう。しかし、生涯にわたって彼ほど聖餐を重視し尊重した人物も少なかった。その彼が、礼拝において聖餐を拒否されたのであるから、彼にとっては一大事であったと思われる。……聖卓に進み出る相手を「疑いによって揺れ動く信仰者」と断じて、主の晩餐への出席を拒否するキリスト教とは一対何なのか？ 弱い信仰者に対してこそ、主の晩餐への招きと慰めはあるべきではないか。恵みの手段は、このような状況の者に尊ばれるべきではないのか。ここで一切の基準とされた「信仰の確信の有無とは何か」ということであった。<sup>6</sup>

それは、結論からいえば、モラヴィア教会との信仰理解の相違であった。相違点は大きく分けて二つあった。第1は信仰の度合いの存在を信じるウェスレーとそれを認めないモラヴィアの相違。第2はあらゆる恵みの手段を利用すべきだと主張するウェスレーと、キリストのみが恵みの手段であると考え、一切の他の恵みの手段を否定するモラヴィア派の相違であった。それはウェスレーのかかわっていたロンドンのフェッターレイソサエティで既に起こっていたことであった。

1738年9月ドイツから帰国して、わたしはキリストの血潮を信じることによる偉大な救いをのべつたえた。同時にそれは、神のすべての戒めを守り、機会あるごとに、すべての人々に善を施しながら待ち望むべき救いでもある。ところが翌39年9月ごろ、わたしたち兄弟の不在中に、第一点、「疑いや恐れを少しでも持つ者、清い心を持たない者は、義とされる信仰を持ってない者たち」と断じる者、第二点、「恵みの手段を否定しないと、真の信仰を持つものではない」と、信仰の静止主義に陥る教を主張する人々が私たちの群（フェッターレイソサエティ）の中に大きな混乱を呼

<sup>6</sup> 岩本助成「オールダースゲイト再考」ウェスレー・メソジスト研究5、ウェスレー・メソジスト学会、教文館、22頁。

び込んだ。モラヴィア派の人々は、人は疑いや恐れからまったく解放されなければ、また厳密な意味で新しい清い心を持たなければ、義とされる信仰に達することは出来ないと主張した。疑いや恐れを排除する前には、恵みの手段を守らなくてもよいと主張したのである。

しかし、わたしは彼らに答えたい。あらゆる恐れ、疑いの解決の前にも「ある程度の信仰」を得ることが出来る。新しい清い心を得る前にも、神の戒め、特に聖餐を守るべきである、と。実は、この真理を、わたしは、イングランド教会からだけでなく、モラヴィア派からも学んだのである。<sup>7</sup>

ウェスレーは信仰を段階的にとらえる。ここからうまれた結論は以下の通りである。

(1) 聖書からみても、教会の伝統から見ても、群の人々の経験からみても、信仰の度合いは (degree, 程度、力量) というものは存在する。(2) また確証 (確信) の度合いも存在する。(3) 「恵みの手段」は、確信に先立って奨励されるべきもの。(4) 義認は必然的に確信を生むものとは言えない。(5) 義認の確証は、必然的に疑いや恐れからの完全な自由をもたらすものではない。(6) 義認の確証は、必然的に全き愛、平和、喜びをもたらすものではない。(7) 信仰の確信は、十全な救いそのものではない。<sup>8</sup>

以上、ウェスレーが経験してきた出来事を述べてきた。ウェスレーは恵みの手段である聖餐をどのような意味で用いようとしたのか。

#### IV 不信仰に陥った者たちへの励ましとしての聖餐

ウェスレーは、聖餐に与ることに明確な意義を持たせた。それは不信仰に陥

<sup>7</sup> 同論文、23頁。

<sup>8</sup> 同論文

った者たちにも、ある程度の信仰は残っており、罪に翻弄されるなかで聖餐を受けることによってもう一度初めの愛に戻ることができるという意義であった。救いの全き確信を持つまでは、誰も主の晩餐を受けるべきでないというモラヴィア派の主張に対して、ウェスレーは

恵みから墮落した場合に、多くの者が、サタンの策略に陥っていると嘆き、その墮落から逃れられないと思ってしまう。その結果、彼らは神の賜物を否定するように説得され、救いの信仰は一度も持たなかったかのように確信してしまう。彼らは恵みの手段を使用しなくなり、キリストのみを信頼すべきだと考え、あわれな罪人であり続ける。<sup>9</sup>

その結果、彼らは神の賜物を否定するように説得され、救いの信仰は一度も持たなかったかのように確信してしまう。結局、彼らは恵みの手段を使用しなくなり、キリストのみを信頼すべきだと考え、あわれな罪人であり続ける。<sup>10</sup>

このように、キリストのみを恵みの手段としてしまう立場に対して、ウェスレーは以下のように語る。

しかし、ついに一人の女性を発見した。多くの者は (彼らの習慣に従って) 彼女には信仰がないことを説得しようとしたが、彼女は彼らが抵抗できない霊によって以下のように答えた。「私が今生きている生は、私を愛し、私にご自身を与えられた神の子における信仰によって生きている。主はパンをさくことにおいて私にあらわれたその瞬間から一度も私を離れなかった。」<sup>11</sup>

さらにウェスレーはその事において以下のことを発見したと語る。

<sup>9</sup> BE Works 19 p.120, Journal 1739.11.7.

<sup>10</sup> Ibid.

<sup>11</sup> Ibid.